

御国の完成に関する黙想 —終末のさばき—

鈴ヶ峰キリスト福音館
聖書研究会 考察
Message by Nobumasa. H
2025. 11. 14

ルカの福音書 21 章

第一部：やもめの献金——終末に残る信仰の型（ルカ 21:1-4）

黙想の出発点

ルカ 21 章は、やもめの献金（1-4 節）から始まり、神殿の崩壊（5-6 節）、迫害と証し（12-19 節）、人の子の来臨（27-28 節）、目を覚まして祈る者の姿（34-36 節）へと展開されていきます。

これまで黙想してきた視座では、

- やもめの献金は、花嫁の整えとして、全き献身の象徴
- 神殿の崩壊は、地上の制度の終わりと新しい契約の始まりの象徴
- 迫害と証しは、供え物としての証人の歩みの象徴
- 人の子の来臨は、復活と嗣業の完成の時
- 目を覚まして祈る者は、御霊によって整えられる花嫁の姿 について黙想することができます。

しかし、1 週間で 1 章を黙想するには時間が足りず、今回は、最初の「やもめの献金」に心を留めたいと思います。

やもめの信仰——命の残りを委ねる

復活の命の保証について、先のルカ 20 章で黙想しました（ルカ 20:35-38）。

ルカ 21 章では、主に委ねる信仰がどのように形を取るかを象徴的に描かれた場面として、やもめの献金が記されています。

やもめは、律法的相続の制度から見れば、最も弱い立場にある者です。

夫を失い、嗣業を保持する力もなく、社会的にほとんど守りのない存在です。

ルカ 20 章でサドカイ人が「七人の兄弟と妻」の問いを持ち出したのも、やもめの立場を通して「いのち（永遠の嗣業）を保持できない律法の限界」が示されることとなりました（ルカ 20:27-33）。

そのような立場にある者の捧げた献金に主は目を留め、満足されました。

「この人は生活費の全部を入れたのです」（ルカ 21:4）と語られたとき、そこには、生活のすべてが神に向かって整えられていたことの証しがあります。

「生活費の全部」とは何か

やもめが捧げた 2 レプタは、その場の思いつきで差し出されたものではなく、おそらく日々のやりくりの中で「主に捧げるために」取り分けられ、守られてきたものだったと受けとめられます。

それは、明日食べるものを買う金がなくなるにもかかわらずそれでも捧げたというチャレンジの意味というより、その瞬間に至るまでのすべての時間と生活が、主への献金に集中して献身されていたということです。

だからこそ、それは「財産全部」であり、「生活そのもの」だったのだと受け止められます。

主はその信仰を見て、「この人は生活費の全部を入れた」と言われました（ルカ 21:4）。このことは、制度が崩れ、神殿の栄光が失われるその直前に、なお残る信仰の型として示されていると思われます。

神殿の崩壊と信仰の残存

この献金の場面の直後、主は神殿の崩壊を予告されます（ルカ 21:5-6）。

神殿は人の手によって築かれた宗教的統治の中心でしたが、救いの保証とはなりません。やもめの献金は、人の手の業が崩れてもなお残る「委ねる信仰」の型として示されると考えます。

ルカ 20 章で主が語られた「神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神です」（ルカ 20:38）の具体的な証でもあります。

生ける命が、歴史の流れの中で「人の築いたものの崩壊」と「神への委ね」を通して形を取っているかのようです（死すべき肉の中ではなく、神の前に生きる信仰の中に、神の命は生きて働かれるのだということが証明される）。

サレプタのやもめ——異邦に顕れた命の保証

この信仰の型は、サレプタのやもめにも重ねて黙想することができます。

「エリヤの時代に、三年六か月雨が降らず、飢饉が全地にあったとき、多くのやもめがイスラエルにいたが、エリヤはそのうちの誰にも遣わされず、シドンのサレプタのやもめのところにだけ遣わされた」（ルカ 4:25-26、列王記上 17 章）

サレプタのやもめは、「粉と油」という命の残りを神に委ね、飢饉という裁きのただ中で養われました。

異邦の世界に顕れた命の保証の型であり、イスラエルの拒絶と異邦人への恵みの対比を鮮やかに浮かび上がらせています。

終末の祈りとやもめの信仰

ルカ 18 章では、不正な裁判官に訴えるやもめのたとえが語られました。

「失望せずに祈り続けることを教えるために」語られたこのたとえ（ルカ 18:1-8）は、終末における義の実現を信じる信仰と、残りの者への祈りの姿を写し出しています。

サレプタのやもめは「粉と油」を、ルカ 21 章のやもめは「生活費の全部」を捧げました。

「命の残り」を神に委ねる姿です。命そのものを差し出す信仰であり、それによって全部の命を得る信仰でもあります。

花嫁の整え——粉と油に養われる者

女は「粉と油＝御言葉と霊」に養われます。

イスラエルに雨が降らない期間は、主が語られた「花婿が取り去られる時」(ルカ 5:35) に似ています。

花嫁は「やもめのように」祈り、待ち望みます。

3 年半の干ばつの間——裁きと識別の期間(終末の 42 か月＝1260 日)——、養われたのは異邦の地シドンのサレプタのやもめでした。

外に呼び出された教会(エクレシア)である花嫁が、祈りと委ねによって整えられる試練の期間の型として黙想されます。

終末の識別——干ばつと霊的飢饉

終末における試練の期間を経て、神の民(イスラエルの残りの者)が識別されます。

エリヤの時代の干ばつも、偶像礼拝に陥ったイスラエルを裁き、真の神を識別させるための期間でした。

干ばつは、霊的には神の御霊のない(その地に働かれず)、御言葉の欠乏に至らせます。

雨は聖書で「命を養う神の言葉」「聖霊の注ぎ」として象徴されます。

雨が降らないとは、神の言葉が閉ざされ、霊的な糧が欠乏する状態を意味します。

「見よ、その日が来る。主なる神が飢饉を地に送る。パンの飢えではなく、水の渇きでもない。主の言葉を聞くことの飢えである」(アモス 8:11)

この終末の様相は、ルツ記のナオミの立場とも一致します。

教会の姿——終末まで養われる者

教会はユダヤの外で召し出され、御言葉と聖霊に養われ続ける姿を先取りしています。

粉(御言葉による命の糧)と油(聖霊による臨在と憐れみ)が尽きないという命の保障は、教会が「終末まで」主の命に養われ続ける保証を示しています。

教会がやもめのように「粉と油」という命の残り(最後)を神に委ねるとき、この糧は、神殿で差し出されたやもめの「生活費の全部」と同様に、命の本質を象徴する献げ物となります。

それは「義」「赦し」「憐れみ」の形として、教会が自分の力では救いを得ることができず、ただ主に委ねて生きることを証しする姿です。

命の代替物としての献げ物

僅かな財産は、生活費の全部でした。

聖書では、お金はしばしば「命の代替物」として扱われます。

借金の赦しは罪の赦しの型となり、施しは憐れみの顕れとなります。

やもめの僅かな財産は、彼女の命の残りを象徴し、それを神に委ねることは「命そのものを神に返す」行為でした。

主は「この人は生活費の全部を入れた」と語られました(ルカ 21:4)。

彼女にとってはそのわずかなものが、本来自分の支えでした。

しかし、そのなお残された命の糧を神に委ねた姿を、主は神に満足される信仰として認めておられます。

このことは、「全部の委ね」「全部のささげ」「全部の赦し」と重なります。

やもめの僅かな財産は、委ねて主によって満たされる姿を映します。

それは、主によって命を守られる共同体の姿です。

花嫁の弱さと御国の完成

人がその全部を神の前に捧げる祈りは、「自分の義」によって全うするのではなく、「主の憐れみ」「主の赦し」によって生きる姿と一致します。

神が愛しておられるものを愛し、神が赦されるものを赦し、神が憐れむものを憐れむ。

神のすべての徳は、自分の生来のものによって生きている自我のすべてを明け渡し、「すべてはキリストである」という御心に生きる祈りへと導かれます。

やもめの僅かな財産は、花嫁が持つ「弱さ」と「委ね」を象徴し、そこに御国の完成の力が顕れます。

そのように整えられた祈りの人、神の義を求める人は、兄息子のように弟の帰りを拒む者とはならず、一時間も労働しなかった者が受ける 1 デナリに腹を立てることもなく、100 デナリの負債を赦すことができないようなことにはならないでしょう。これらは、すべて、神が赦して(愛して)いるのに赦すことのできないという、自分自身の義によって立っていたのでした。しかし、主に整えられる者はそうであってはならないのです。神の恵みに生きる者は神の憐れみが自らをして人を生かすことを知っています。

神の命に養われ続けるその先に、不正な裁判官に訴えたやもめのように、終末まで神ご自身の義の実現——すなわち世の救い、残れる者の命の贖い——の実現を求め続ける信仰の祈りがあります。

それが、終末に生きる主を待ち望むやもめの姿でした (ルカ 18:1-8)。

第二部 神殿崩壊の予告

第一部では、神殿崩壊の予告がなされる最中に、終末の闇の中で消えずに燃え続ける信仰の芯として献身の姿を黙想してきました。

第二部では、神殿の崩壊という預言を通して、人の手の業による信仰の終わりと、神の御業によって残るものの識別を深めていきます。

神殿の崩壊——人の手の業の終わり（ルカ 21:5-6）

ある人々が、神殿が見事な石と奉納物で飾られていることを語っていたとき、主イエスは言われました

「あなたがたが見ているこれらの物ですが、どの石も崩されずに、ほかの石の上に残ることのない日が、やって来ます」（ルカ 21:6）

この言葉は、人の手によって築かれた宗教的栄光が、主の日に崩れ去ることを告げる預言です。

弟子たちや群衆が見とれていた神殿は、ヘロデ王によって増築された壮麗な建造物であり、金と大理石で飾られ、信仰の中心として人々の心の拠り所となっていました。

しかし主は、その見事さに感嘆する人々に対して、「一つの石も残らない」と断言されました。

それは、人の手の業に依存する信仰は崩され、神の御業によって立てられるものだけが残るという識別へと導いておられます。

崩壊の預言は、紀元 70 年、ローマ軍によるエルサレム陥落と神殿破壊によって現実のものとなりました。

不信仰に対する神の裁きであり、神殿を司っていた祭司たちも歴史から姿を消すことになります。

やもめの礼拝は、人の目には取るに足らないもののように見えても、神の御前では真実の礼拝として認められました（ルカ 21:3-4 参照）。それは、神の御業によって残る信仰の型です。

人の手の業による栄光は崩れ去り、神に委ねられた信仰は残りました。

19 章・20 章で示された

「家を建てる者たちの捨てた石、それが礎の石となった」（詩篇 118:22）

「その石の上に落ちる者は打ち砕かれ、その石が誰かの上に落ちれば、その人を粉々にする」（ルカ 20:17-18）

との預言は、

「人手によらずに切り出された石が像の鉄と粘土の足を打ち砕いた」

「その石は大きな山となって全地に満ちた」

「その王国は永遠に続き、他の民に渡されることはない」（ダニエル 2:34-35, 44-45）

とのみことばと関連し、この石は、拒まれたメシア＝キリストで、彼を拒む者は砕かれ、彼によって裁かれる者は粉々にされます。

ダニエル書では人間の王国を碎き、神の国を打ち立てる終末的メシアの象徴です。

「人手によらず」という表現は、人間の制度・手の業によらない神の御業を示しています。

神殿の崩壊の預言は同時にキリストの御体の死と復活とも関係します。

「この神殿を壊してみなさい。わたしは三日でそれを建て直す」(ヨハネ 2:19)

(ヨハネは「イエスはご自分の体のことを言われたのである」と注記しています。ヨハネ 2:21)

主は、ご自身の死と復活を「神殿の崩壊と再建」として語られ、神殿の崩壊は主の肉の死の型でした。

神殿は「人の手によって築かれたもの」であり、「死すべき肉の体」の象徴です。

主イエスは「神殿としての肉体」を十字架で崩されました。

「肉は何の益ももたらさない。わたしがあなたがたに話したことばは霊であり、また命である」(ヨハネ 6:63)

私たちのその肉は、信仰によって、キリストとのバプテスマによって、キリストともに死んだのでした。

キリストにおいて裁きがすでに成し遂げられているにもかかわらず、それを拒むならば、その裁きは自らの身に及ぶことになります。

キリストの死がイスラエルに無意味なものとしてみなされる(拒絶する)のであれば、主の肉において受けられた裁きは、イスラエルとは関係のないものとみなされ、イスラエル自身に及ぶことを象徴しています。

キリストご自身がヨナのしるしを与えたように、主は

「ヨナが三日三晩魚の腹にいたように、人の子も三日三晩地の中に」(マタイ 12:40)

おられました。

ヨナは主の死と復活の型であり、その深淵を主ご自身が通られました。

しかし、イスラエルがこのしるしを拒むならば、イスラエル自身がヨナの道——すなわち、深淵を通る道——を歩むことになります。

それは、ラザロと金持ちの譬え(ルカ 16:19-31)において、悔い改めなき者が黄泉に下る姿として描かれています。

同時に、ヨナのしるしが唯一与えられたしるしであることを思うとき、それは復活のしるしであり、深淵の中での悔い改めと告白を通して、憐れみによって引き上げられる希望もまた、その唯一残されたしるしに含まれていることを黙想することができます。

「エルサレムの娘たち、わたしのために泣くな。むしろ、自分自身と自分の子どもたちのために泣け」(ルカ 23:28)

主の死に感情的反応ですべてを覆うのではなく、靈的識別へと心に向けるよう促されました。

イスラエルは主を拒絶しました。

「この神殿を壊してみなさい。わたしは三日でそれを建て直す」(ヨハネ 2:19)

神殿の再建は、新しい神の家であり、復活による新しい命として顕れました。

御国の礎となり、その礎の上に新しい神の家が築き上げられます。

「あなたがたも、生ける石として靈的な家に築き上げられ…」(I ペテロ 2:5)

とあるように、御国の礎の上に築かれる神の家には、私たちも招かれているのです。

ダニエル書の「人手によらず切り出された石」は、人間の王国を砕き、神の国を打ち立てます。

石は「山となって全地に満ち」ます。

ネブカデネザルの夢に現れた像が、金・銀・青銅・鉄・粘土で構成される世界帝国の象徴として描かれます。

その像の足を砕くのが「人手によらず切り出された石」であり、

それが「大きな山となって全地に満ちる」と預言されています(ダニエル 2:34-35, 44-45)

山は「神の王国の中心」「終末における支配の場」として描かれます。

「終わりの日に、主の家の山は山々の頂に堅く立ち、すべての国がそこに流れてくる」

(イザヤ 2:2-3)

「主の教えがシオンから出る」(ミカ 4:1-2)

エフタの娘が山々を巡ったのも印象的です。

彼女の姿は、主の御前に自らをささげる者が、山において主と交わる靈的型として映し出されます。

この山の黙想は、神の国の完成と、そこに至る道を歩む者たちの姿を照らし出します。

キリストの来臨のとき、御国の完成があり、御国は御子の支配が全地に及ぶ光景を示します。

ペテロは、あなたがたも生ける石として、築き上げられるように語りました。

その石はキリストであり、キリストの礎石の上に建てられる主のしもべです。

そしてその支配は、これまで黙想してきたように、異邦人の支配のような統治ではなく、主御自身の御姿が栄光を帯びて形となって現れる主の日に至る光景を待ち望みます。

ルカ 21 章後半(27-28 節)では、「人の子が雲に乗って来る」ことが語られ、来臨の時に贖いが完成します。

「これらのことが起こり始めたら、身を起こして頭を上げなさい。あなたがたの贖いが近づいているのです」(ルカ 21:28)

このように、神殿の崩壊の預言は、
人の手による栄光の終わりと、神の御業によって築かれる御国の始まりを告げるしるしでした。

主の死と復活を通して、裁きと再建が成し遂げられ、私たちは、生ける石として、御国の完成に向かって築き上げられていくのです。